

Saddanīti における vibhatti と vacana

渡 邊 要 一 郎

1. はじめに パーリ文法学はサンスクリット文法学の著作である Kātantravyākaraṇa (Kāt) に依拠する Kaccāyana (Kacc, およそ 7 世紀) と、その最初の注釈である Kaccāyanavutti (Kacc-v) を嚆矢とする。その後 12 世紀、ビルマで学僧 Aggavaṃsa が、Kacc, Kacc-v と、それに対する Mukhamattadīpanī (Mmd, およそ 11 世紀) 等の注釈に依拠し、Kacc に対する異論も提示しつつ、Saddanīti (Sadd) という大著を著述した。また、ほぼ同時期にセイロン島では Cāndravyākaraṇa (CV) に依拠した、Moggallānavyākaraṇa (Mogg) とその自註 Moggallāna-vutti (Mogg-v) が著された。サンスクリット文法学は、Pāṇini による Aṣṭādhyāyī を代表とするが、パーリ文法学は、Pāṇini に必ずしも立脚しているわけではない。従って、術語に関しても Pāṇini の用いている意味と異なったものが見られる場合がある。例えば、一般に文法上の「性」を意味する liṅga という語が、Kacc, Sadd では「語幹」(prātipadika) の意味でも用いられていると指摘されているが、これは Kacc が依拠した Kāt の影響であると言われる¹⁾。しかしながら、かかる事例はごく数例報告されているに過ぎず、パーリ文法学の術語に対する研究は未だ不十分である。そこで本論では一般に名詞・動詞語尾として理解される vibhatti と、単数・複数の「数」を意味すると理解される vacana という術語の Sadd における意味を考察する。

2. Vibhatti の定義 vibhatti という用語に関して、Sadd は kammādayo vā kārake ekavacanabahuvacanavasena vibhajatī ti vibhatti (Sadd 15, 4-5) 「また、行為対象などの kāraka を単数・複数によって分け離すから、vibhatti である」; syādayo tyādayo ca saddā vibhattināmakā bhavanti. kammādivasena ekattādivasena ca vividhā bhājjiyantī ti vibhatti (Sadd 641, 25-26) 「si をはじめとする音と、ti をはじめとする音は、vibhatti という名前を持つものである。行為対象などによって、また、単数性などによって、様々に分けられるから、vibhatti である」という語源解釈を行っている。特に後者は Mmd にほぼ一致し、引用であると思われる²⁾。ここでは、kāraka だけでは

なくて、単数・複数といった「数」を表示することも vibhatti の機能であると理解される。一方、同時期に成立した Mogg-v は名詞に関する vibhatti を *etāni satta dukāni satta vibhattiyo; vibhāgo vibhattīti katvā* (Mogg-v 2.1) 「これら 7 つの 2 つひと組が、7 つの vibhatti である。区分 (vibhāga) が vibhatti であると考えて」と解釈する。これは CV の文章をほぼそのままパーリ語に直したものである。Mogg-v の解釈する vibhatti とは単数・複数の要素により区分されないもので、個別具体の語尾のふたつひと組のセット、あるいは単に“case”「格」として先行研究では理解されている³⁾。以上を踏まえ、両者の vibhatti 概念の違いを明確にする必要から、本論では Mogg-v のようなタイプの vibhatti を「語尾の組」と訳し、Sadd の述べる「数」により分けられる個別具体の vibhatti を「語尾」と暫定的に訳し分ける。

3. Sadd における vibhatti の用例 それでは Sadd では、全ての vibhatti が個別具体の「語尾」として理解できるものなのであろうか。Sadd は文法要素の個数を問題にする場合が多いが、そのような場面で、先述の定義に反するような「語尾の組」としての vibhatti が見られる場合がある。

【例 1】 *vibhattī t' īdha satt' eva, tattha c' aṭṭha pavuccare . . . vacanadvayasamūyuttā ekekā tā vibhattiyo* (Sadd 60, 3-14). vibhatti とは、こ [の学派] では 7 つだけであるが、それに対して 8 つ⁴⁾ が言われている。… vacana の 2 つひと組を備えた、ひとつひとつが vibhatti である。

【例 2】 *ekavacanabahuvacanakāhi sattahi aṭṭhahi vā nānavibhattīhi channavutiyā ca ākhyāti-kavacanehi yojitāni na santi, nayavasena pana santi yeva* (Sadd 157, 3-6). 単数・複数を持つ 7 つあるいは 8 つの名詞 vibhatti と、96 の動詞に関する vacana [ひとつずつ] と結びつけられたものとして [それぞれの名詞・動詞は聖典中には] 存在しないが、[変化表の] 指針によって存在するより他にない。

【例 3】 *ikāren eva sahitā dve bhavanti vibhattiyo, satta dvādasa hont' ettha vacanāni ti lakkhaye* (Sadd 49, 10-11). i 音を伴った 2 つの vibhatti (= parokkhā, bhavissantī) がある。このなかでは、7 つと、12 の [i 音を伴った] vacana があると考えるべきである。

【例 1】【例 2】では名詞に、また、【例 3】では動詞に関する vibhatti が述べられている。このような文脈での、vibhatti という語は Mogg-v の「語尾の組」という意味に近似している。すなわち、Mmd からの引用と思しき vibhatti の定義と、Sadd 自身の用法との間には微妙な齟齬が存在する。さらにこれらの用例を見ても、vibhatti が「語尾の組」であって、その下位区分の「語尾」にあたる要素の数え上げには、vacana という語が用いられている。このような vacana は、文法学上の術語である「数」にあたりと単純には考え難い。「～という言葉」という程度の、術

(226)

Saddanīti における vibhatti と vacana (渡 邊)

語として特に意味を持たない語としても理解しうる⁵⁾が、このような vacana という語の意味を Sadd の記述のみからこれ以上判断することは難しい。

4. 後代の文献における vacana 解釈 しかし、14 世紀に成立したとされ、文法要素の個数の数え上げを主眼の一つとする Kaccāyanabheda には、【例 2】で見られるような「96 の動詞に関する vacana」という用法を解釈していると思しき詩節が見られる。同書は vibhatti と vacana の関係を次のように述べている。

vibhatti jātito aṭṭha soḷasa padato siyuṃ / aṭṭhatālīsā yogena tatheva purisena cāti // (154)

channavuti tu hont' ete vacanassa pabhedato / paropurisabhedena asītīti pakāsītā // (155)

vibhatti とは、類から 8 つ⁶⁾、[attanopada, parassapada という] pada から 16 であるべし。[mayoga, tayoga, aññayoga という] yoga によって 48 であるべし。同様に、人称によっても [48 であるべし]。一方で、これらは数 (vacana) の区分によって 96 となる。後続する purisa の区分によって 80 と解き明かされる。

このテキストは、直接に Sadd を参照していた確実な根拠はなく、【例 2】のような記述を直接解釈していると断言することはできないが、この詩節で用いられている用語の Sadd との類似性から⁷⁾、Sadd と類似する議論を念頭に置いていたと想定できる。もしも Kaccāyanabheda のような理解を Sadd が為していたのだとすると、vacana とは「[単数・複数という「数」としての] vacana に区分された [類としての] vibhatti」であると理解することができよう。この解釈が正当であるかはともかく、後代で整合的解釈の必要性を産んだ程度には vibhatti という用語の意味範囲に関する揺れが存在していたと理解できよう。

1) Renou (1957, 128) ; Deokar (2008, 164-169) ; Ruiz-Falqués (2015, 406-413) を参照。

2) Mmd 70, 28-71, 1: vividhā bhājīyatīti vibhatti // kammādivasena ca ekattādivasena ca vibhājeti // Mmd の vibhatti 解釈と後代の理解に関しては Ruiz-Falqués (2015, 414) を参照。

3) これらの vibhatti の持つ意味の差異と CV, Mogg-v の関係については Deokar (2008, 177-181) に指摘されている。また Pāṇini の体系に於いても vibhakti が「語尾」を示すか、「語尾の組」を示すかに関して議論があり、Mahābhāṣya ではいずれの立場も許容されていたようである。これに関しては Sharma (2012, 354-355) を参照。

4) 一般に、文法学では第 8 格を認めず、vocative を第 1 格の特別な意味であると設定する。Sadd も第 3 巻 Suttamālā ではそのような理解に従うが (Sadd §§576-578; Deokar (2008, 186) 参照)、第 1 巻 Padamālā では、7 つの格と 8 つの格という立場が併記・許容されており (Sadd 89, 12-15; 100, 27 参照)、両巻の内容に齟齬が見られる。

5) Kacc-v では特に文法学上の術語としての意味を持たないと思われる vacana が複合語後部に位置している場合がある。Cf. Kacc-v 69: ādi icc etasmā smiṃvacanassa aṃ o ādesā honti vā; Kacc-v 192: tasmā sakhāto smiṃvacanassa ekāro hoti. このような用例だけから、Kacc-v では vacana という語

は vibhatti 「語尾」と置換可能な文法学上の術語であったと理解するのは困難であるが、Sadd では、かかる用例から vacana が「語尾」を表す術語であると強引に解釈され、実際に使用された可能性は想定できる。このような “case ending” という意味で理解しうる vacana に関しては Deokar (2008, 181–182) を参照。6) vattamāna (現在) から kālātipatti (条件法) までの動詞語尾の種類。Deokar (2008, 191–197) を参照。7) 一人称を明示する ahaṃ などの語を mayoga, 二人称を明示する tvam などの語を tayoga, 三人称を明示する主格の語を aññayoga と称する。Sadd 26, 1–4 を参照。paropurisa とは「語尾」を並べた際に、先頭に起こる paṭhamapurisa 単数を除いたもの。Sadd 23, 1 を参照。いずれも Kacc には見られない用語。

〈一次文献〉

CV: *Cāndravyākaraṇa of Candragomin*. Ed. Kshitish Chandra Chatterji. 2 vols. Sources of Indo-Aryan Lexicography, no. 13. Poona: Deccan College Postgraduate & Research Institute, 1953–1961. **Kacc**, **Kacc-v**: *Kaccāyana and Kaccāyanavutti*. Ed. Ole Holten Pind. With an index prepared by S. Kasamatsu, and Y. Ousaka. Bristol: Pali Text Society, 2013. **Kaccāyanabheda**: *Saddā-ñay 15 coṅ pāṭh*. Yangon: Icchāsaya Press, 1964. **Mmd**: *Nyāsapāṭha* (= Mukhamattadīpanī). Yangon: Sudhammavati cā puṃ nhip tuik, 1933. **Mogg**, **Mogg-v**: *Moggallāna Vyākaraṇa*. Ed. Bhadanta Ananda Kausalyayana. Sarvanand Universal Series, no. 46. Hoshiarpur: Vishveshvaranand Institute Publication, 1965. **Sadd**: *Saddanīti: La grammaire palié d’Aggavaṃsa*. I *Padamālā*, II *Dhātumālā*, III *Suttamālā* (1928–1930), IV–V, 2 *Tables* (1949–1966). Acta Reg, Societatis Humaniorum Litterarum Lundensis, no. 12: 1–12: 5, 2. Ed. Helmer Smith. Lund: Gleerup. Reprint, Oxford: Pali Text Society, 2001.

〈二次文献〉

Deokar, Mahesh A. 2008. *Technical Terms and Technique of the Pali and Sanskrit Grammarians*. Miscellaneous Series, no. 23. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies. **Renou**, Louis. 1957. “Kaccāyana et la Kātantra.” In vol. 3 of *Études védiques et pāṇinéennes*, 127–133. Paris: E. de Boccard. **Ruiz-Falqués**, Aleix. 2015. “The Creative Erudition of Chapaṭa Saddhammajotipāla, a 15th-Century Grammarian and Philosopher from Burma.” *Journal of Indian Philosophy* 43 (4/5): 389–426. **Sharma**, Ram Krishna. 2012. “Vibhakti in Pāṇini.” In *Studies in Sanskrit Grammars: Proceedings of the Vyākaraṇa Section of the 14th World Sanskrit Conference*, ed. George Cardona, Ashok Aklujkar, and Hideyo Ogawa, 351–357. New Delhi: D. K. Printworld.

(JSPS 特別研究員奨励費 (課題番号 15J10793) による研究成果の一部)

〈キーワード〉 Saddanīti, Kaccāyanabheda, パーリ文法学, vibhatti, vacana
(東京大学大学院, 日本学術振興会特別研究員)